

「荻外荘通り」の愛称が決まったばかりですが、その道の北端に近いところで異彩を放っている建物があります。国の有形文化財にも登録されている「西郊ロッジ」です。洋風下宿として開業したのは昭和5年のことですが、「江戸川乱歩の小説に出て来そうな雰囲気がある」と言う人も



昭和13年に竣工した当時の西郊ロッジ新館

いる建物で、印象的なのは昭和13年に完成した新館のドーム型の屋根。いったい、この丸屋根は何をイメージしてデザインされたのでしょうか。灯台？ それともモスク？

答えは、配水塔です。しかも、モデルとなった塔が現存します。中野区にある荒玉水道の野方配水塔です。荒玉水道は、関東大震災後、東京市に隣接した町村の急激な都市化による水の需要に応じるため、砧から多摩

川の水を引いて、当時の豊多摩、北豊島、両郡の13の町村に供給する目的で建設されました。設計は、ドイツで衛生工学を学び、淀橋浄水場をつくった「近代水道の父」中島鋭治博士(1858～1925)。

昭和4年に完成した配水塔は、昭和41年に本来の役割を終え、以後、災害用貯水槽として使われ、平成22年に国登録有形文化財になりました。「ドーム型の屋根が、地域の特徴ある景観をかたちづくり、江古田の水道タンク、みずの塔、貯水塔などと親しまれてきた、東京近郊都市化のシンボルです」と、中野区の案内板にあります。

西郊ロッジの塔のデザインは、現在のご主人・平間美民さんの祖父・美喜松さんが技術者として野方の配水塔の建設にかかわったことから生まれました。荻窪が「西郊」つまり「東京の西の郊外」だった時代に建てられた「西郊ロッジ」。文字通り「東京近郊都市化のシンボル」と言えそうです。

「荻窪の記憶」プロジェクト 松井和男



旧野方配水塔(中野区江古田)